



『透明なゆりかご』はこの連載で取り上げたいと思っていたのですが、知らないうちにTVドラマになっていました。とてもよくできており、毎回、産婦人科で繰り広げられる生命のドラマに感動させられています。

原作者の漫画家、沖田×華（おきたばっか）さんは学習障害やADHD、アスペルガー障害の当事者。自身の幼少期の経験についても作品に取り上げています。『透明なゆりかご』は1997年頃、看護学科の高校3年生だった沖田さんの体験がもとになった作品です。母親のすすめで産婦人科の個人病院で見習い看護師としてアルバイトをした体験がもとになり、さまざまな人間模様が描かれています。

産婦人科医療の現場では、出産の喜びだけではなく、中絶や性的虐待など、人生の残酷さや不条理さにも遭遇します。そういったテーマにもストレートに触れる作品ですが、デフォルメが効いた絵柄のせいか、グロテスクな表現にはなりません。それでも、ときには空白の多い絵に描かれていない何かが、読み手の想像力を喚起して、胸に迫る表現を作り出しています。

90年代後半、「できちゃった結婚」がとても流行っていました。その時期にアルバイトをした沖田さんは、医師から「日本人の死亡原因の第1位は、本当は人工妊娠中絶だ」と明かされます。ガンでもなく、心臓疾患でもありません。沖田さんは後のインタビューで、1日に必ず1件から3件程度の中絶手術が行われ、夏休みが終わる頃の時期は高校生や大学生がたくさん通院していたと語っています。

妊娠中絶手術の手伝いをした沖田さんは、かき出された胎児の「かけら」を瓶に入れてケースにつめる作業を命じられます。ケースにはもう一つ、すでに瓶が入っており、「よかったね。ひとりじゃなくて」というセリフがつけられています。ケースは業者のおじさんが回収に来て、「今日は2体です」と渡されていきます。

中絶胎児の扱いは自治体ごとに違いがあります。沖田さんがアルバイトをしていた地域

では、妊娠4ヶ月（12週）未満の中絶胎児は「医療廃棄物」つまりモノでしかない扱いでした。中絶した女性の痛みとは裏腹に、医療や法制度では実に淡々とした扱いが進められます。

ちなみに妊娠12週以降21週6日までの中絶手術は死産扱いとなり、戸籍に残ります（それ以降は中絶手術はできません）。役所に死産届を提出し、胎児の埋葬許可証をもらう必要も出てきます。

「カレシカノジョの間でできた子を中絶する女は自業自得、この病院でよく言われていたことだ。…私も前はそう思っていた。でもそれがすべてじゃないことをこの仕事をして知った」。これは第四話（一巻）に出てくる作者のモノローグ。中学の後輩に駅前で偶然会った沖田さんは、幼く見える後輩から「堕しに行く」という告白を聞いて驚かされます。「カレシには言った？」と問いかけると「仕事が忙しいみたいで…電話に出なくなっちゃって…」。後輩のつぶやきを受けて、ふたたび作者のモノローグにつながります。「一回逃げた男は何をしても帰ってこない。女が妊娠したと伝えたとたん連絡がつかなくなる。相手に相談することもできず、お金も用意できないまま一人ぼっちで放置されるのを数え切れないくらい見てきた——。」

性交渉は妊娠につながり、出産は子育てにつながります。知識としては知っていても自分の身に振りかかる事とは想像できず、目先の欲求にしか意識が行かない人も世の中にはいます。それは男性に限らないかもしれませんが、やはり女性のほうが多くの傷つきを抱える可能性を持つことになります。

今年6月、千葉県の高校で生まれたばかりの赤ちゃんの遺体が発見されるという事件がありました。誰が産んだのかは分かりません。こうした事件があると産んだ女性に対するバッシングが多く発生します。しかし周囲のサポートがなく孤立した女性が仕方なく起こした出来事だったのではないかと考えてしまいます。

第十話（二巻）にはカナダ人の「ドゥーラさん」が登場します。ひとの名前ではなく、出産前後の女性に付き添う女性のことです。医療職ではなく、出産経験の必要もありません。いくらかの謝礼金を受け取りますが、ボランティアで引き受ける人も多く存在します。

「ドゥーラは赤ちゃんが亡くなった時も付き添うことがあります。産めなかった人はとてもつらい状態にいるけど、私がそばにいてだけで落ち着くこともあるんです…ただただ悲しみをみんなで分かち合えばいいんです」。

そう語るドゥーラのケリーさんも早期流産をしたことがあるといます。まわりはそれほどショックを受けていなかったのですが、ケリーさんは「せっかく宿した命の光を私は消してしまった」とつらい気持ちになっていました。そのときケリーさんは「流産」という漢字の意味を知ったといます。「流産で亡くなった赤ちゃんは母親の悪いことも抱えて流してくれる」。死んだ赤ちゃんにも使命があったのだと考えることができた、だからドゥーラ

になったのかもしれないとケリーさんは話しました。

中絶と流産を同じように語られることには抵抗がある人もいるでしょう。でも、小さな命の光が消えていく時間をひとりで過ごすことはとても辛く悲しいことです。そこに付き添い、励ます人がいてくれるならば、どれだけ救われるでしょうか。

生まれた後の赤ちゃんに対しては、万一の場合、行政が保護をします。でも赤ちゃんを生む前の女性は十分に保護されていないように感じられます。妊娠や出産についても、社会保障がケアできる部分があることを、義務教育段階から知らせる必要があると考えます。

参考サイト

○日本の死因第1位はガンじゃない!? 産婦人科実録コミック『透明なゆりかご』作者・沖田×華インタビュー

<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/43299>

○妊婦死亡、流産、14歳の母親……知られざる産婦人科の現場から

<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/45795>

○妊娠4か月（12週）未満の中絶胎児の取扱いに関するアンケート調査結果

<http://www.env.go.jp/press/files/jp/6034.pdf>

※ 本連載へのご意見、ご感想などをお聞かせください。

sako@hgu.ac.jp 迫 共（さこともや）